SAMSUNG

2026年11月24日

※サムスン電子(韓国本社)配信のコンテンツを翻訳した内容です。
※使用できる機能は国・地域・OS バージョン、デバイスのモデルなどによって異なります。

＜報道関係者各位＞

メダルのその先へ：Samsung がユース オリンピック競技大会（ダカール 2026）で若き選手の未来探求をサポート

サムスン電子株式会社（韓国本社、以下 Samsung）は、ワールドワイド・オリンピック・パラリンピック・パートナーとして、ユース オリンピック競技大会（ダカール 2026）をサポートしました。メダリストが表彰台で撮影する「ビクトリーセルフィー」や競技中継のほか、ユースオリンピック村に設けた体験スペース「Samsung Open Station」に至るまで、Samsung Galaxy の最先端テクノロジーを提供しました。

10 月 31 日から 11 月 13 日までセネガルで開催された本大会は、アフリカ大陸で初開催となるオリンピックイベントであり、25 競技で約 2,700 人の若き選手が一堂に会しました。2010 年シンガポールの第 1 回大会からユースオリンピックへのサポートを続けてきた Samsung は、今回のダカール 2026 においても技術支援にとどまらず、若き選手一人ひとりの成長も後押ししました。

本大会に出場した選手たちにとって、オリンピックの舞台に立つことは長年の努力の成果です。しかし、人生の糧となる教訓の中には、その道のりで得られたものもあります。挫折を乗り越え、困難から立ち直る力を培い、競技の「結果」以上に大切なものを見いだすプロセスに大きな意味があります。

そのような想いのもと、Samsung は 11 月 3 日、ユースオリンピック村の「Samsung Open Station」にて、メンタリングセッション『メダルのその先へ：これまでの歩みが未来を創る（Beyond the Medal: Your Journey Shapes What Comes Next）』を開催しました。オリンピックの道を歩んできたトップの選手たちを招いたこのセッションは、次世代を担う選手たちに誇りとモチベーションをもたらし、Samsung のオリンピックパートナーシップの核である「オープンネス（Openness）」の精神を共有することを目的として実施されました。



▲「Samsung Open Station」で開催されたメンタリングセッション（写真提供：IOC／Franco Arland）

本セッションには、IOC アスリート・ロールモデル※1 を務めるセネガルのカヌースラロームの Jean-Pierre Bourhis 選手（31 歳）とウガンダの競泳の Jamila Lunkuse 選手（29 歳）の 2 名が、ニュージーランドのテニス銅メダリスト Marcus Daniell 選手（36 歳）とともに参加し、若き選手たちと対話を行いました。

※1 IOC アスリート・ロールモデル（ARM）は、シンガポール 2010 以来、ユースオリンピックに導入されています。各競技の国際競技連盟によって選出された経験豊富なオリンピアンたちが現地に滞在し、若きアスリートたちとの対話をはじめ、キャリアマネジメントやケガの予防などをテーマとしたワークショップを実施することで、次世代を担うアスリートの育成を支援しています。



▲（左から）Jean-Pierre Bourhis 選手（セネガル／カヌースラローム）、Jamila Lunkuse 選手（ウガンダ／競泳）、Marcus Daniell 選手（ニュージーランド／テニス）（写真提供：Getty Images）

サムスン電子アフリカ法人の CSR マネージャーLefa Makgato がモデレーターを務めた本セッションでは、3 名のメンターと 12 カ国から参加した 28 名の若き選手が一堂に会しました。メンターたちは現在に至るまでの自身の歩みを共有し、競技スポーツを終えた後の人生にどのような可能性が広がっているのかを探求するための道しるべを示しました。

自分自身の進むべき道を切り開く

セッションの冒頭、Makgato は各メンターに対し「自身のオリンピックへの道のりはどこから始まったのか」を問いかけました。

2016 年リオデジャネイロオリンピックおよび東京 2020 オリンピックにセネガル代表として出場し、Samsung のドキュメンタリーショートフィルム『Voices of Galaxy: Paddling for the Future』にも出演している Jean-Pierre Bourhis 選手のオリンピックへの夢が形になったのは、2008 年にトーゴ代表の Benjamin Boukpeti 選手が北京 2008 オリンピックのカヤック競技で銅メダルを獲得した時でした。

Bourhis 選手は「アフリカの選手でも表彰台に上がれるのだと、子どもの頃の私は気づかされました。2016 年リオデジャネイロオリンピックへの出場を通じて、自らの手で道を切り開けると確信したのです。そして今の私の使命は、後に続く選手たちのために、その道を開き続けることだと思っています。」と続けました。



▲ Samsung のメンタリングセッションに登壇した IOC アスリート・ロールモデルの Jean-Pierre Bourhis 選手（セネガル）
（写真提供：IOC / Franco Arland）

15 歳でオリンピックデビューを果たした Lunkuse 選手は、「メダルやオリンピックのことなど考えてもいませんでした。ただ、友人たちと一緒に何かに取り組むのが楽しくて、それがこの競技を好きになったきっかけでした。」と、水泳を始めたきっかけは野心ではなく友情だったと当時を振り返りました。

また、東京 2020 オリンピックにおいてニュージーランドのテニス界に 109 年ぶりとなるオリンピックのメダルをもたらした Daniell 選手は、「大好きだったスポーツを手放したからこそ、テニスにすべてを捧げなければならないと覚悟を決めました。」と 14 歳でサッカーではなくテニスを選んだ決断について触れました。

限界を打ち破る、困難から得る学び

その後、対話のテーマは、各メンターがこれまでの競技人生で直面した最大の「壁」へと移りました。

セネガルにはカヌースラローム用の急流施設がほとんどなかったため、Bourhis 選手はフランスに練習拠点を築く必要がありました。その上、電気自動車の修理を専門とするエンジニアとしてフルタイムで働きながらの挑戦でもありました。Bourhis 選手は「エンジニアである私にとって、限界とは立ちはだかる壁ではなく、解決すべき課題です。仕事の前や昼休みあるいは深夜にトレーニングを重ねています。私を絶えず前へと突き動かしているのは、明確な目的意識なのです。」と力強く語りました。

Lunkuse 選手はリオデジャネイロ 2016 オリンピックを前に、抱えていたプレッシャーについて「出場資格を得るための記録をクリアすることばかりに気を取られ、いつしか水泳を楽しめなくなりました。一度競技から離れてみて、初めて自分が今どのような状況にあり、どんな助けを必要としているのかを客観的に見つめ直すことができました。その気づきがあったからこそ、私はリオデジャネイロ 2016 オリンピックの舞台に立つことができたのです。」と率直に明かしました。



▲ Samsung のメンタリングセッションに登壇した IOC アスリート・ロールモデルの Jamila Lunkuse 選手（ウガンダ）
（写真提供：IOC / Franco Arland）

Daniell 選手は約 2 年間にわたり競技からの離脱を余儀なくされた 2022 年の膝のケガについて、「その苦境を乗り越えられたのはテニス以上に大きな目的を持っていたからです。失敗は誰にでもあります。続けられるのは、つまずいた時に自ら立ち上がる術を学んだ人です。」と、当時を振り返りました。

競技のその先へ、経験を次なるチャンスに変える

セッションの最後に、Makgato は「スポーツから得た教訓がその後の人生にどのように活かされているか」について問いかけました。

Bourhis 選手は非営利活動を通じて、セネガルでカヌー競技のエコシステム（基盤）構築に取り組んでいます。「私たちは一歩ずつその基盤を築いています。現地でカヌーを製造することで、より手ごろな費用で競技を始められるようになるだけでなく、地元に雇用を創出し、長期的な遺産を築くことができます。次世代の若者たちに自らの道を切り開くための手段を提供したいと願っています。」と語りました。

ユース世代のコーチであり、世界水泳連盟（World Aquatics）のアスリート委員会メンバーでもある Lunkuse 氏は「競技の結果だけがあなたの価値を決めるわけではありません。」と若き選手たちに対して「結果」の先にあるものに目を向けるよう、語りかけました。

同様に、IOC アスリート委員会のメンバーであり、選手と慈善団体を繋ぐ非営利団体「High Impact Athletes」の創設者でもある Daniell 氏も「個人の成功の先にある目標を見つけましょう。私にとっては、それこそが自分を前へ突き動かし続ける原動力でした。」とアドバイスを送りました。



▲ Samsung のメンタリングセッションに登壇した東京 2020 オリンピックメダリストの Marcus Daniell 氏（ニュージーランド）
（写真提供：IOC / Franco Arland）

次世代の可能性を切り開く



▲ 本セッションのモデレーターを務めたサムスン電子アフリカ法人の CSR マネージャー　Lefa Makgato
（写真提供：IOC / Franco Arland）

Makgato は、自身のエピソードを交えてセッションを締めくくりました。南アフリカの小さな町で育った Makgato が初めてコンピュータに触れたのは 18 歳の時で、Samsung の太陽光発電インターネットスクール（Solar Powered Internet Schools）でのことでした。その後、サムスン電子アフリカ法人に入社し、現在は、「Solve for Tomorrow」をはじめとするアフリカ全土の CSR プログラムを統括しています。かつて自身が得たようなチャンスを次世代の若者たちに提供しています。ひとつの機会が人生を大きく変えることを身をもって知っているからこそ、この日、若き選手たちの前に立つことには大きな意義がありました。

「テクノロジーや教育へのアクセスが想像もしなかったような未来への扉を開くということを、私は自身の経

験から知っています。現在の環境が、皆さんの向かう先を決めるわけではありません。私たちは若き選手たちに対し、新しいアイデアに対して常にオープンであり続け、自らの未来を形作る大きな可能性を秘めていることに気づいてほしいと伝えたかったのです。」と Makgato は語りました。



▲「Samsung Open Station」でセルフィーを撮影する（左から）Jamila Lunkuse 氏、Jean-Pierre Bourhis 選手、Marcus Daniell 氏（写真提供：IOC / Franco Arland）

●「Samsung Galaxy」は Samsung Electronics Co., Ltd.の商標または登録商標です。
●その他、記載されている会社名、商品名、サービス名等は、各社の商標または登録商標です。